

写生と象徴

小島なお

北原白秋は雑誌「多磨」の理念を「第一期から第三期の」どれとも異なる新しい象徴の創生」と書いた。一卷一号から四号に連載した長大な「多磨綱領」には、「象徴」の語が繰り返して使われる。この頃の白秋にとつて、「新幽玄体」を実現するために「象徴」がいかに重要なキーワードであったかがわかる。

「象徴」とは何か。それがいまいち綱領では掴みにくい。「新幽玄体」期のひとつの達成として挙げられる第九歌集『溪流唱』の冒頭の作「行く水の目にとどまらぬ青水沫あをみなわ鶴鴿の尾は触れにたりけり」について、白秋自らが説明した言葉を参考にしてみたい。

「行く水の目にとどまらぬ青水沫」といふのは、やはり無常の相であります。(略)その無常の相にホンの一瞬飛んで来て鶴鴿の尾が触れたのであります。(略) 生きた、実にピリピリしたものが、この中に大事な結縁をなして居るのではないかと思ふのであります。だから、これはやはり写生ではありませんけれども、普通の写生ではありません。

この鶴鴿はやはり取りも直さず我々の姿であり、又我々の魂であります。だからかういふ所にやはり象徴詩のゆき方といふものを追うて欲しいものだと思ふのであります。歌に即しつつ具体的に「象徴詩のゆき方」が示されている。私という存在が、偶然に、

自然にこの世の無常に触れる瞬間がある。それを鶴鴿の姿に託したのだと。真理という抽象的な概念を、具象を介して描き出している。写生を土台に据えながら、写し取ったものの奥から言葉にしがたい想念を滲ませる。

ここで心に留めておきたいのは斎藤茂吉の「象徴」の存在である。「実相に観入して自然・自己一元の生を写す。これが短歌上の写生である。『アララギ』に連載された「短歌に於ける写生の説」で提唱された写生論。茂吉の写生論は流動的である上に難解でもあるので、ここでも具体的な歌「赤茄子あかなすの腐くれてゐたるところより幾程いくばくもなき歩みなりけり」についての茂吉本人の言葉を取り上げながら、白秋と比較してゆく。

トマトが赤く熟して捨てられて居る、こ

れは現実で即ち写生である。作者はそれを目にとめ、そこを通つて来たが、数歩にしてふと何かの写象が念頭をかすめたのであらう。(略)併し「歩みなりけり」と詠歎してゐるのだから、その写象といふものは一種の感動が附帯してゐることが分かる。(略)さういふのも私は写生と云つて居る。写生を突きすすめて行けば象徴の域に到達するといふ考は、その頃から既にあったことが分かる。

他人事のような妙な文章だが、伝えようとしている内容は二人ともほぼ同じである。アララギ対明星の対立構図で語られがちな両者の立ち位置に反して、その志はほとんど同じ地点にあったと考えていいだろう。

最後に写生について述べた塚本邦雄の文章を『短歌名言辞典』から引用しておく。

リアリズムとは、決して、実際に存在したことを、そのまま忠実に再現したことを勃つたことを、そのまゝ忠実に再現(記録)することではあるまい。未だ現には経験していない諸相を、存在した以上に鮮烈に活写することではないのか。それこそが詩歌における、二十一世紀へのあり得べき「写生」であり、同時に「象徴」になるまい。